

# 人づなぐ 鉄路

写真・文 津島修三  
〈秋田市在住〉

秋田内陸縦貫鉄道に20人ほどいる運転士の一人、押川清和さん(40歳)からのエピソードを伺った。ある日の乗務中、運転席横でかぶりつくようにしている鉄道ファンらしい小学生がいたので、途中駅の停車時間に話しかけてあげたり、記念撮影用に制帽をかぶせてあげたら、後日その少年からお礼の手紙が届いたというのだ。

押川さんは大阪出身。子供の頃にお父さんがあちこち旅に連れて行って、それで自身も旅行好き、鉄道好きになったのだという。内陸線の運転席から少年に声をかけたのも、その少年の姿がかつての自分とだぶったからだろう。

大阪時代、押川さんは鉄道好きが高じて関西の大手私鉄に就職した。そして休暇を利用しては全国を旅して回った。たまたま秋田で内陸線に乗った時、一人の女性車掌と知り合った。それが今の奥さん。二人は結婚後しばらく大阪で暮らしていたが、押川さんはいつの頃からか無性に田舎暮らしに憧れるようになった。「秋田で暮らしたいと言ったら、自分の親族だけでなく女房にも反対されました」と苦笑する。そんな周囲の反対を押し切って平成13年に秋田に1ターンを果たす。大阪の私鉄勤務時代の最後は通勤電車の運転士だったので、その経験を生かして内陸線に運転士の職も得られた。

毎日角館と鷹巣の間を乗務しながら、自らが選択したスローライフを満喫している。車窓から眺める四季折々の風景の豊かな表情の移ろい。いつになく乗客が多いと「ああ、今日は市日か」と気づく(阿仁合は4のつく日が市日)。特に急ぎの用事でもないのに内陸線存続の願いを込めてしばしば利用してくれる人もいる。「運賃だけでも少くない出費なのに、ありがたくて泣けてきます」と押川さんは言う。

そして最近実感しているのは、地元沿線住民以外の観光客、旅行者が微増していること。確かに、全国的に見てもこれほどの大自然のまっただ中を行く味わい深いローカル線は珍しいのではないか。内陸線自体が秋田の貴重な観光資源だ。「お荷物」ではなく「資源」として、これを生かしていけないものかと思う。

内陸線は朝5時台から最終は夜10時過ぎまで1日に延べ38本の列車が運行される、地域の頼もしいライフラインだ。これが廃止になったら、沿線の過疎化に拍車がかからないか気がかり

